茨木市内出土の滑石製石鍋について

木村　健明

１．はじめに

今回取り上げる滑石製石鍋（以下､石鍋と記述）とは、主に中世に使用されていた器で、滑石（註１）を刳り貫いて作られている。10 ～ 16 世紀にかけて生産され、北海道を除くほぼすべての地域に流通していたことが分かっている（註２）。

近畿地方では、瀬戸内海に面する地域から紀伊半島西岸にかけて出土遺跡が濃密に分布する。出土傾向として、物資集散地・官人層の居住地・荘園中核集落・寺院関係など主要幹線沿いの遺跡に集中しており、瀬戸内海沿岸の港湾から京都へ運ばれていたことが認められる（松尾 2017）。

出土した石鍋には、外面に煤の付着する事例が多く、直接火にかけて使用されたと考えられる。後述するように、史料でも石鍋を火にかけて使用しており、このことを裏付ける。

生産地は長崎県西彼杵半島の他、福岡県・山口県で製作遺跡が確認されている（註３）。しかし、福岡県内の製作遺跡は小規模であるため、周辺の限定的な範囲に供給されたものと考えられており、山口県のものは河川水利及び海上交通と連携して各地へ運ばれている例もあるが（今岡ほか 2005）、肉眼での識別は不可能なこともあり、現時点では各地で出土している石鍋の大半は西彼杵半島産とされている。

２．茨木市内の石鍋・石鍋再加工品の出土遺跡

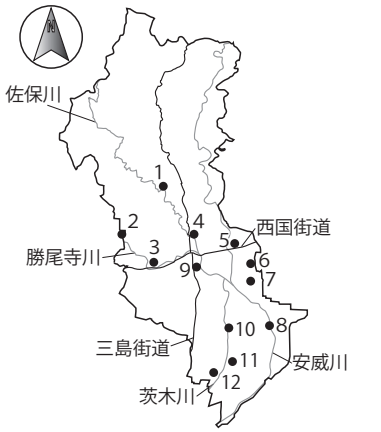
茨木市内では図１に見るように、現時点で 12 遺跡から出土が確認されている（註４）。遺跡の性格は大きく集落遺跡（図１－２・３・５～ 12）と墳墓遺跡(図１－１・４)に分けることができる。

大多数は市域中部の丘陵部から南部の平野部にかけて所在する集落遺跡からの出土である。

墳墓遺跡（１・４）から出土しているのは、再加工品である温石のみであり、石鍋の分布とは分けて考える必要があるのかもしれない（註５）。

石鍋の製作された時期は、10 世紀末から 16 世紀初頭と考えられているが（木戸 1995）、茨木市周辺も含めた関西地方で最も流通量が多いのは 12 世紀後半～ 14 世紀初頭にかけての時期である（鋤柄 2010）。

以下、各遺跡の概要を記しておく。なお各遺跡の時期は、石鍋が製作された 10 世紀末～ 16 世紀初頭の間に限って記す。また、文献に記される地名・荘園名と埋蔵文化財包蔵地の範囲とが一致しているとは限らないことを断っておく。



1. 佐保栗栖山南墳墓群　7. 総持寺遺跡
2. 粟生間谷遺跡　8. 溝咋遺跡
3. 宿久庄遺跡　9. 中河原遺跡
4. 真龍寺古墳群　10. 新庄遺跡
5. 太田遺跡　11. 玉櫛遺跡
6. 総持寺北遺跡　12. 東奈良遺跡

図１　滑石製品出土遺跡分布図

１　佐保栗栖山南墳墓群（財団法人　大阪府文化財調査研究センター（以下、大文セ）2000）

茨木市北部の山間部に位置する墳墓遺跡で、遺跡の北西に位置する佐保集落の墓域と考えられている。13 世紀末から営まれ、多くの石造物を伴う墓が検出されている。ただし、墓壙と石造物とは必ずしも対応していないことが分かっている。

２　粟生間谷遺跡（大文セ 2003a）

茨木市と箕面市とに跨る 10 世紀後葉～ 15 世紀にかけて営まれた集落遺跡である。「摂津国島下郡粟生村」に比定されている（註６）。集落の盛期は 11 世紀中葉～ 13 世紀後葉である。

西国街道（山陽道）の北方に立地しており、高麗青磁など希少な遺物も出土していることから流通の要所であったと考えられている。

３　宿久庄遺跡（茨木市教育委員会（以下、市教委）2022・2023a）

箕面市との市境付近に位置する。12 ～ 13 世紀を中心とする集落遺跡である。10 世紀前半に「法勝院領宿久荘」（註７）、11 世紀前半に「中宮領宿御庄」（註８）と「中宮職領宿久御園」（註９）が存在していたことが確認できる。

４　真龍寺古墳（茨木市 2014）

安威川右岸の丘陵から南に延びる尾根上に位置する古墳時代後期の古墳である。石室内から中世の遺物が出土している。

５　太田遺跡（市教委 2020）

富田台地西側の低地に所在する遺跡である。遺跡範囲内を西国街道（山陽道）が東西方向に通る。12 世紀以降に造酒司領太田保（註 10）、13 世紀以降には太田宿（註 11）が所在する。

６　総持寺北遺跡（大文セ 1998a）

太田遺跡と総持寺遺跡の間に位置する。13 世紀頃の集落遺跡である。

７　総持寺遺跡（市教委 2012 年度調査）

総持寺北遺跡の南側に位置する。遺跡内に西国三十三所霊場の総持寺が所在する。富田台地上から台地西側の低地にかけて広がる遺跡である。

中世では総持寺の近辺に総持寺の所領が散在していることから、関わりが想定される（註 12）。

８　溝咋遺跡（市教委 2001）

市域南部に位置し、安威川の両岸に跨っている。溝杭庄の名を冠する荘園は複数認められ、それらと関連する可能性がある（註 13）。

９　中河原遺跡（市教委 2023b）

市域中部の千里丘陵の東側斜面に位置する。ただし、中世の様相は不明確である。

10　新庄遺跡（大阪府教育委員会 1996）

市域南部、茨木川旧流路の左岸に位置する。古代末～中世にかけての集落と耕作地を確認している。古代末には越州窯青磁や定窯・荊窯白磁が出土するなど一般集落とは異なった様相を示しており、「垂水東牧」との関連が想定されている。

11　玉櫛遺跡（大文セ 1998b・2003b・2008、市教委 2012）

市域南部の平野部に位置する。遺跡西部で 11 世紀後葉～ 15 世紀の遺構・遺物が多数検出されている。黄釉鉄絵盤など希少な遺物も出土しており、流通の要所であったと考えられている。

12　東奈良遺跡（市教委 1991）

玉櫛遺跡の西側に隣接し、中世段階では一連の遺跡の可能性がある。興福寺領沢良宜（沢良木）庄・水尾村などとの関連が考えられる（註 14）。

３．出土した滑石製石鍋・石鍋再加工品（註 15）

本節では個々の出土事例を記す。以下の型式分類および時期については木戸雅寿氏の編年案によっている（木戸 1995・図２）。以下、本稿に関するものについて簡潔に特徴を記す。

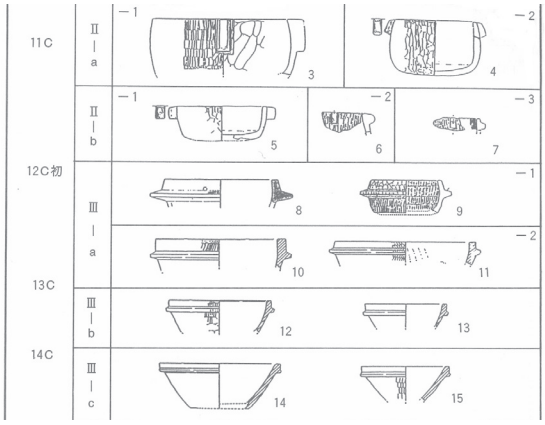


図２　石鍋分類図（木戸 1995 より抜粋）

Ⅱ類　口縁部の四方に瘤状の把手のつくもの。ａ類は把手断面が縦長、ｂ類は横長である。把手の形態によって細分が可能とされる。

Ⅲ類　口縁部直下に削り出された鍔がめぐるもの。鍔の断面形状によって細分される。口縁部はａ・ｂ類は直立し、ｃ類は斜め上方に立ち上がる。またｂ類以降は底径が口径のおよそ半分程度となる。

11 世紀（図３・註 16）

Ⅱ類が総持寺遺跡と粟生間谷遺跡（１・２）で出土している。この時期の石鍋は流通量が限られているようで（松尾 2016）、おそらく市内で出土する石鍋としては最古の部類となるだろう。

総持寺遺跡　現在整理中の資料（2012-3 調査）であるが、口縁部に瘤状の把手を持ち、口縁部は内彎する。

粟生間谷遺跡　１は縦長の瘤状把手をもつ。２は横長の瘤状把手をもつ。13 世紀前後の土器を伴う土坑 52 からの出土だが、瘤状把手を有する点を評価すると 11 世紀代と考えられる。

11 世紀後半～ 12 世紀初頭（図３）

この時期は玉櫛遺跡の１点のみである。

玉櫛遺跡　３は底部の再加工途中の破片である。

12 世紀後半～ 13 世紀前半（図３）

この時期は玉櫛遺跡・宿久庄遺跡・粟生間谷遺跡・真龍寺古墳で出土している。型式の判断できるものはいずれもⅢ類－ａである。

玉櫛遺跡　４は鍔が斜めに下がる台形状を呈する。５はおよそ２分の１程度が残存し、全体の形状を窺える資料である。

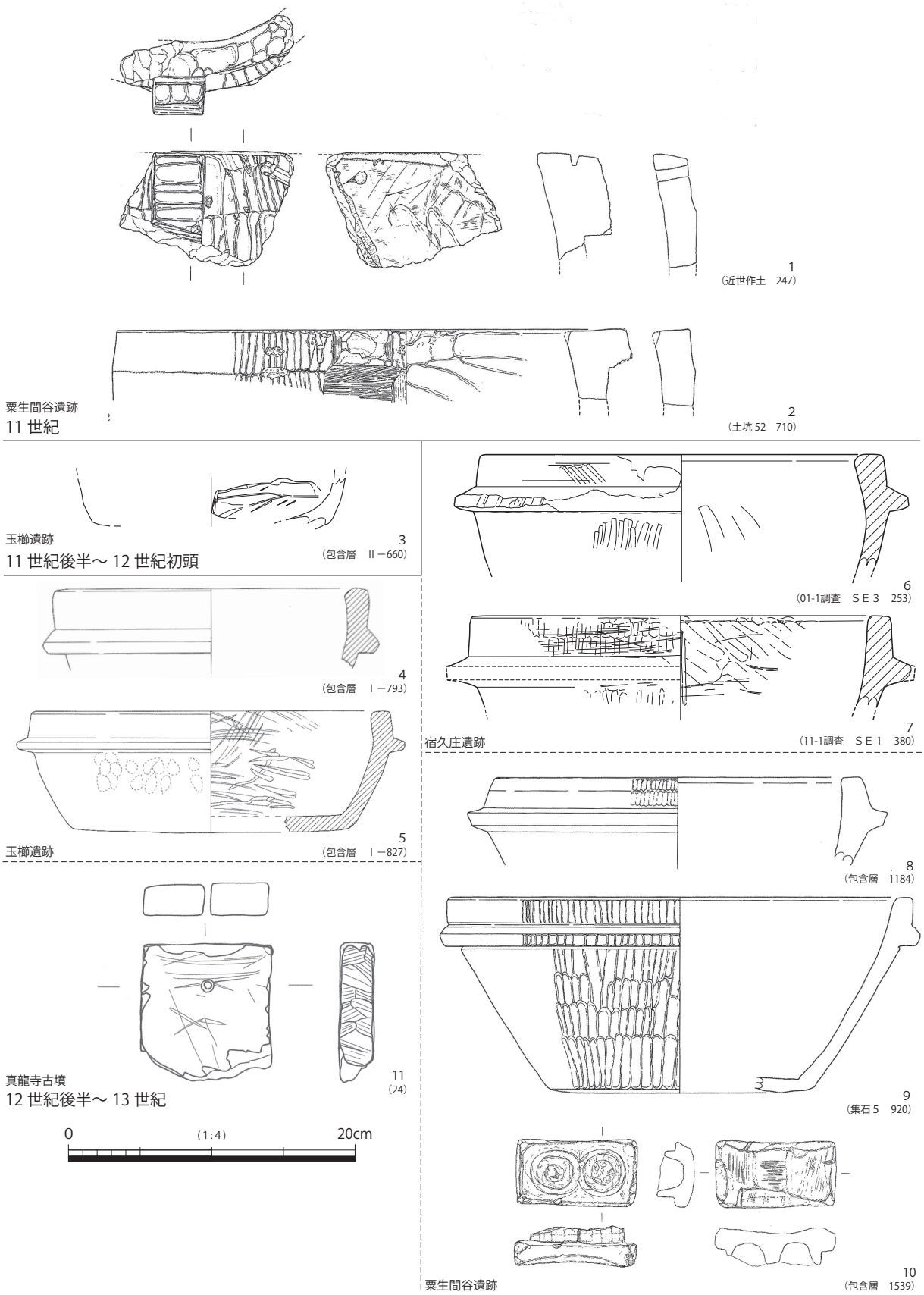


図３　11 世紀～ 13 世紀前半の滑石製品

宿久庄遺跡　01-1 調査（６）はＳＥ３出土、11-1 調査（７）はＳＥ１出土である。共に 12 世紀後半に比定される。

粟生間谷遺跡　石鍋２点（８・９）、ペン立て状石製品（木戸 1993・甲斐 2001・註 17）１点（10）が出土している。９が出土した集石５からは 14

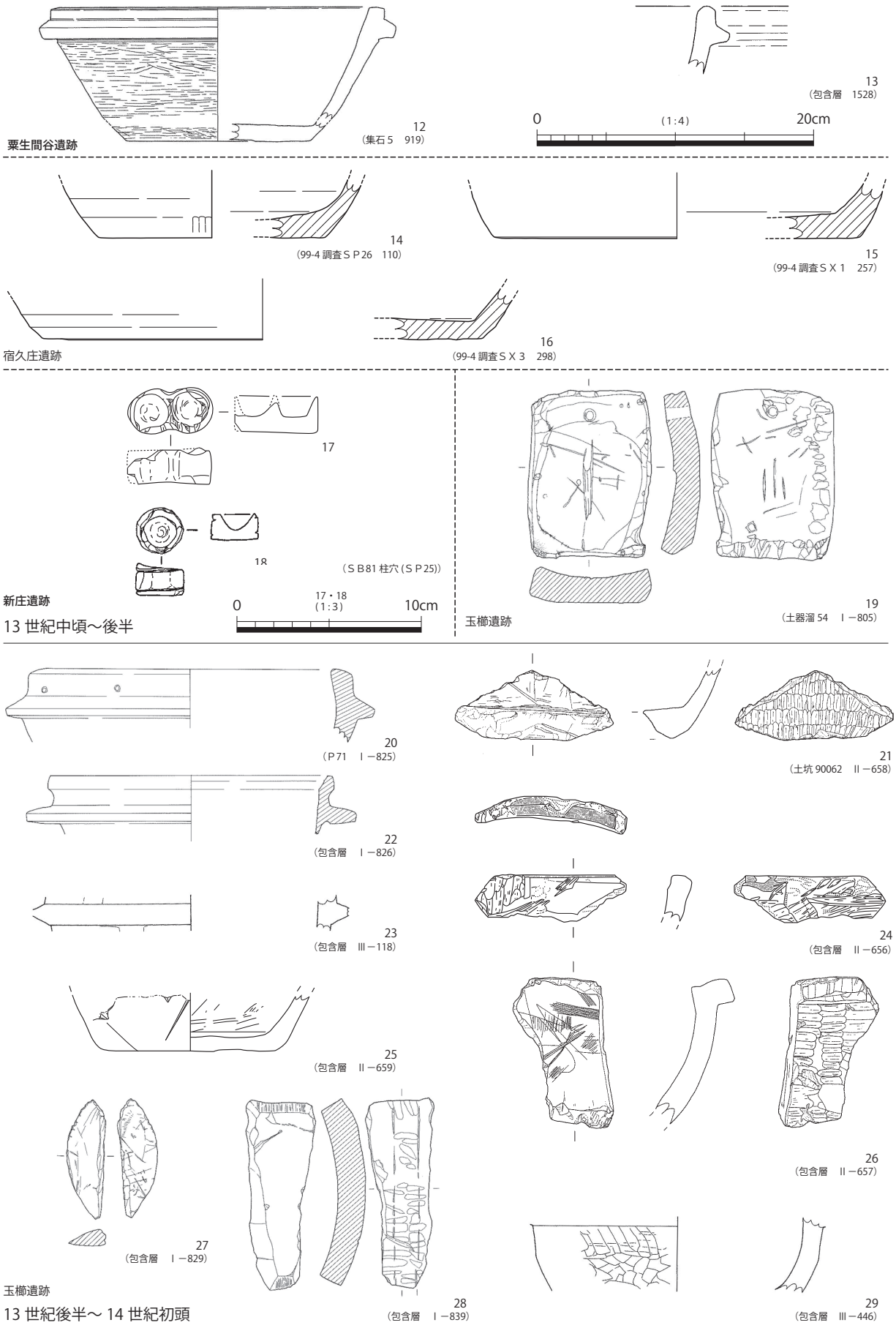


図４　13 世紀中頃～ 14 世紀初めの滑石製品

世紀～15世紀にかけての土器が出土しているが、９は12～13世紀のⅢ類－ａである。８も同じくⅢ類－ａである。

真龍寺古墳　温石（11）は共に図示される瓦器椀の時期が13世紀前半頃と思われるので、この時期に比定できようか。

13世紀中頃～後半（図４）

この時期は、粟生間谷遺跡・宿久庄遺跡・新庄遺跡・玉櫛遺跡で出土している。

粟生間谷遺跡　12・13の２点が出土している。12は先述した９と同様、集石５出土である。13は12世紀から13世紀の遺物を含む第５層からの出土である。12・13は鍔から口縁部までが９より短いので、Ⅲ類－ｂと判断した。

宿久庄遺跡　石鍋３点が出土している（99-4調査-14・15・16）。いずれも底部片であり、共伴した遺物から時期を判断した。

新庄遺跡　ペン立て状石製品２点（17・18）が出土している。共に掘立柱建物の柱穴からの出土で「宅鎮と考えられる祭祀行為」に用いられたものと推測されている。

玉櫛遺跡　19は土器溜54出土の温石である。直径0.9㎝の孔を穿つ。

13世紀後半～14世紀初頭（図４）

この時期では玉櫛遺跡のみで確認でき、再加工に伴う破片が多く出土している。

20は口縁部に穿孔を施している。石鍋を再加工する際の痕跡であろうか。21は底部、29は体部片である。23は石鍋の鍔部分で、鍔下に煤が付着する。24～27は再加工時の破片である。24は口縁部分、25は底部、26は体部片で鍔の一部が残るが、口縁部は欠損する。27は部位は定かではない。煤の付着する上から磨いた痕跡が認められる。22は図では鍔の根元が窪み、口縁部が外方へ広がる形態で､他とは異なった形態である。現時点で類例が確認できないため、口縁部内面と鍔下が欠損し、磨滅している可能性も考えられよう。28は石鍋の鍔部分を削り取った痕跡が筋状に残る。報告書では縦方向に掲載されているが、本来は鍔を水平にするのが正位置となろう。

14～15世紀（図５）

この時期は、玉櫛遺跡・栗栖山南墳墓群で出土している。

玉櫛遺跡　石鍋３点（30･31･32）と温石２点（33･34）が出土している。

31は鍔が斜めに下がり、口縁部が面をもたず丸くなっている。Ⅲ類－ｃか。30は土坑2280出土である。この土坑を検出した遺構面は14世紀代～15世紀と考えられている。ただし、図面から判断する限りでは12世紀代のⅢ類－ａに該当するかもしれない。32は体部の再加工品である。

栗栖山南墳墓群　11号墓と382号墓からそれぞれ１点ずつ石鍋再加工品の温石が出土している（35・36）。

時期不明（図６）

包含層などからの出土で時期の判断がし難い底部・体部の破片と単独出土の温石である。

粟生間谷遺跡　38は包含層出土の底部片、37は近世作土出土の温石である。

宿久庄遺跡　39は温石で、縄文時代から近世の遺物を含む包含層からの出土である。中世の遺物は11世紀後半～13世紀中頃が主体である。

太田遺跡　2019-3調査で石鍋の体部片が１点出土している（40）。共に出土した遺物がいずれも細片であったため、明確な時期比定は困難であるが、９～12世紀のものが混在している。

総持寺北遺跡　表採資料の底部片である（42）。

溝咋遺跡　2000年度の調査で石鍋が出土している。報文中に記されているが、実見できておらず詳細は不明である。

中河原遺跡　1980-2調査で底部片（41）が出土している。

玉櫛遺跡　43は石鍋の再加工品である。図の天が口縁と考えられる。11世紀後半～13世紀前葉の遺物が混じって出土しているため、時期を決め難い。44は鍔部分の破片と考えられる。穿孔が２箇所認められる。

東奈良遺跡　1990-1調査で温石１点が出土している（45）。この他、整理中の調査区（2013-1・2015-13調査）で、体部片と底部片の出土を確認している。

以上のように、現時点で報告がなされている茨木市内出土の石鍋および再加工品は44点に上る。

時期別では、11世紀が２点、11世紀後半～12世紀初頭が１点､12世紀後半～13世紀が８点（内再加工品２点）、13世紀中頃～後半が８点（内再加工品３点）、13世紀後半～14世紀初頭が10点、14世紀～15世紀が７点（内再加工品４点）、時

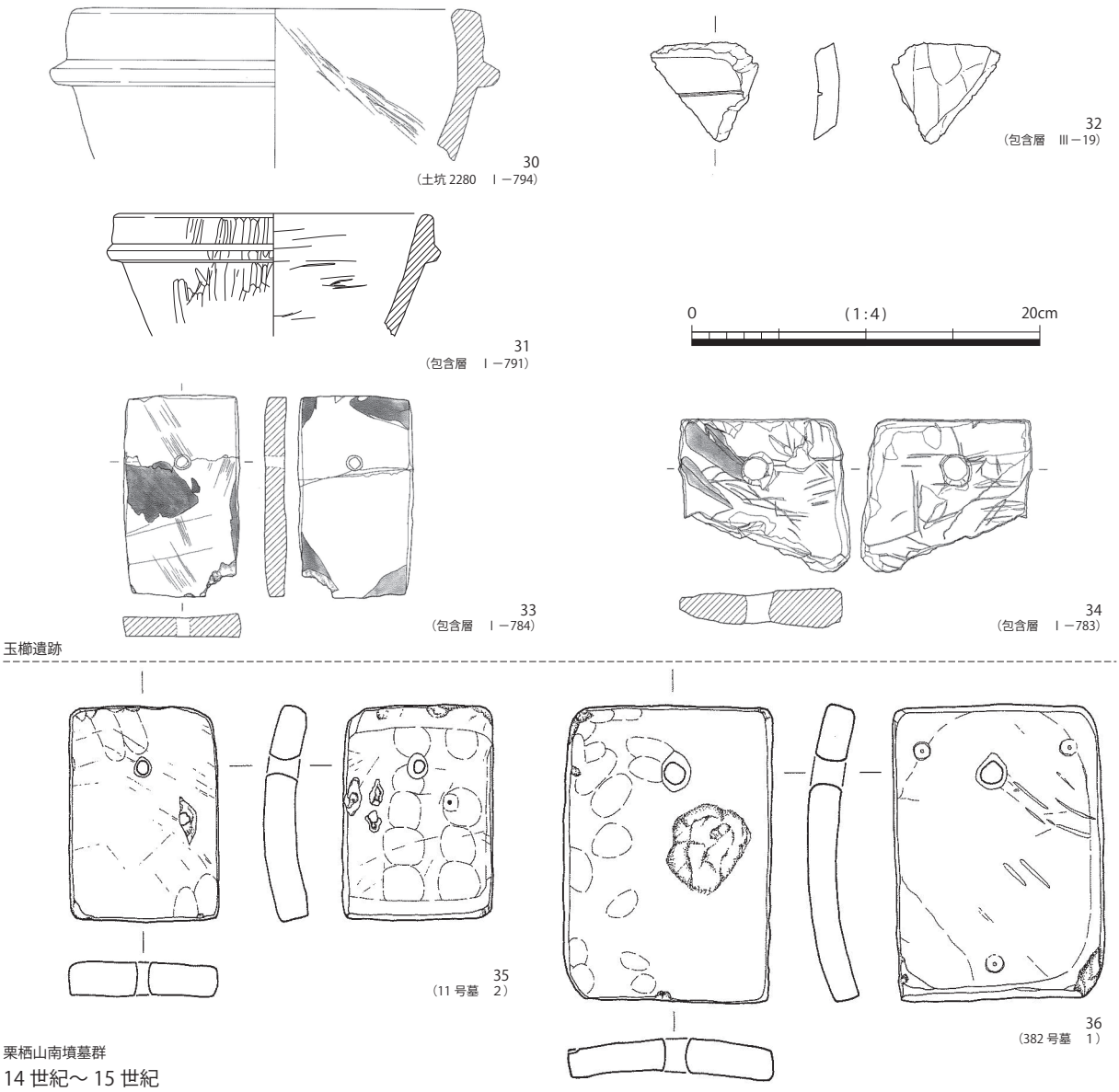


図５　14 世紀～ 15 世紀の滑石製品

期不明が９点である。再加工品を除くと 12 世紀後半～ 14 世紀初頭にかけて多く出土していることが窺える。

遺跡別では玉櫛遺跡が 28 点と他を圧倒して多い（註 18）が、報告書中で「再加工途中の破片」とされているものが多い。

４．史料に現れる石鍋

前節までに出土資料について見てきた。一方で僅かながら文書・日記や儀式・調理に関する故実書に石鍋についての記述を確認することができるため、以下に記す。

史料で確認できるのは、以下の５点である。

①『小右記』　万寿４年（1027 年）12 月８日条に藤原実資への肥前守惟宗貴重からの進物に「温石鍋二口、大一口」とある（東京大学史料編纂所 1976）。

石鍋に大小の区別が存在することが分かる。

②「筑前国船越荘未進勘文」『平安遺文』2197 天承元年（1131 年）６月２日付の筑前船越荘の過去２年間の未進物の中に「石坩一口　但阿加那へ斗納　直十疋」とある（竹内理三編 1963）。

①・②より 11 世紀・12 世紀には、北部九州の肥前・筑前から進物として納められていたことが分かる。

③『兵禅記』　久安４年（1146 年）10 月４日条に鳥羽天皇皇后の高陽院泰子が白河新殿に移徒する際の台盤所の雑具として石鍋がみえる（註 19・明治書院 1991）。

皇后の移徒に伴って必要となる道具であったの

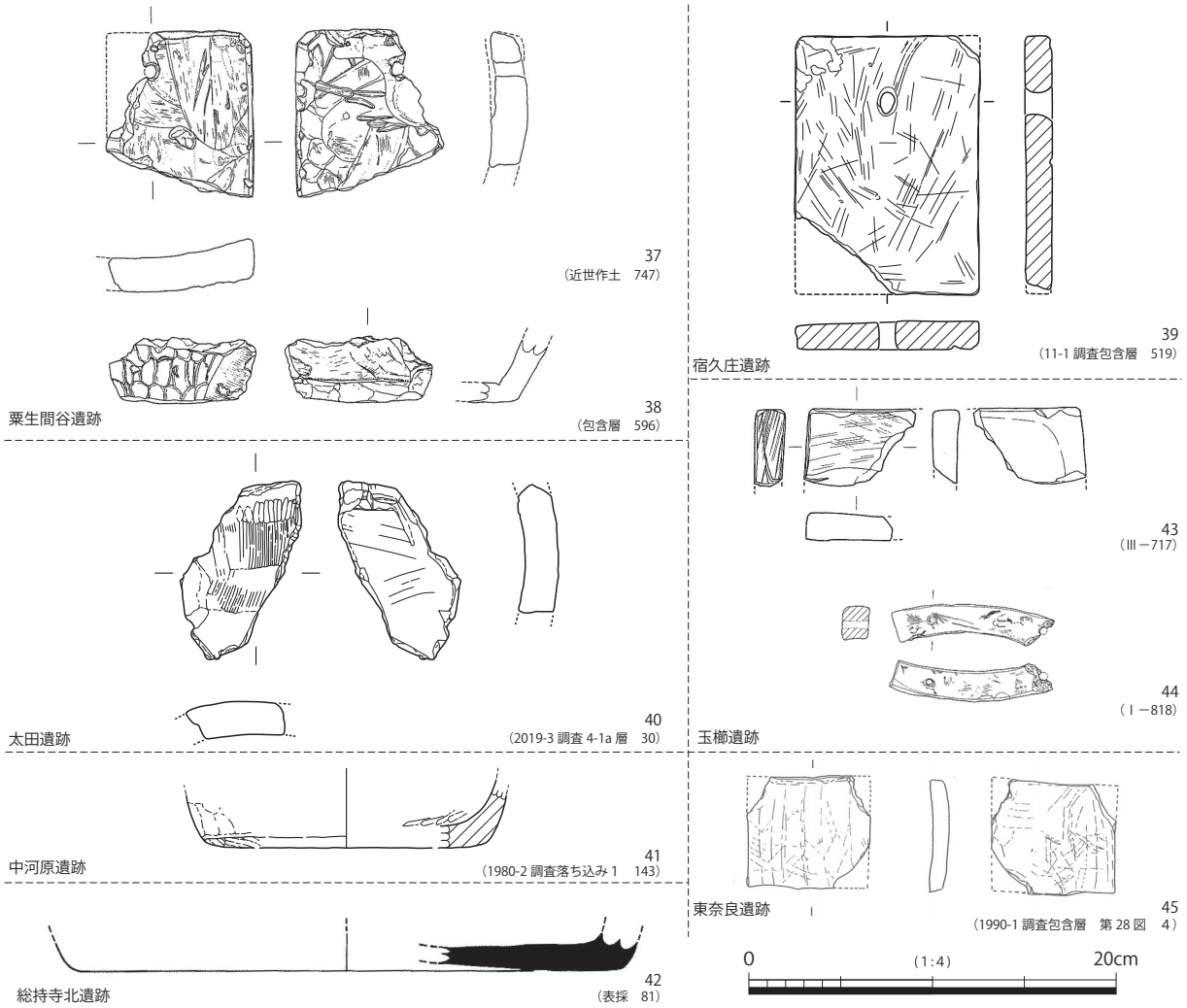


図６　時期不明の滑石製品

だろう。

④「力王丸田畠家財譲状」『鎌倉遺文』8635　弘長元年（1261 年）３月 17 日付、牛飼の力王丸が子の毘沙門丸へ譲る家財の中に「石なへ一」とある（竹内編 1977）。

13 世紀には牛飼童でも所有でき、また譲渡する家財であったことも分かる（註 20）。

⑤『教言卿記』 応永 12 年（1405 年）10 月 12 日条に「石鍋ムキウルシニテ、ヤカテオンシヤクヲコソケテ、交テツクロウ、源阿ミ」とあり、破損した石鍋を、削った温石（おそらく同じ滑石製であろう）と麦漆を混ぜて補修したことが記されている（続群書類従完成会 1970）。

15 世紀には中級貴族である山科家で石鍋を漆で修理している。修理して使用する価値を有していたのであろう。

また、故実書に記載が認められるのは、以下の３点である。

⑥『類従雑要抄』 久安４年（1146 年）頃に左大臣藤原頼長の家司藤原親隆が記したとされる。儀式や行事に使用する調度品などをくわしく図解している（続群書類従完成会 1929）。

巻４に「煎蜜法」として「銅石鍋同用」とある。また「甘葛煎方」として、「器用石鍋又銅物」とあり、石鍋または銅鍋を用いて弱火で７日間煎り続けている。蜂蜜・甘葛は甘味料の一つでもあるが、練香を作る際にも用いられる。「煎蜜法」・「甘葛煎方」共に香についての項目に含まれていることから、練香の材料として記載されたと考えられる。（小泉 1998）。

⑦『厨事類記』 国内で最古の料理書の一つとされるもので永仁三年（1295 年）頃の成立と考えられており、平安時代末期から鎌倉時代末期の宮中の献立について記される（続群書類従完成会 1933）。「調味故実」の「暑預粥」の調理方法に「石ナベニテニル」とある。ただし、調味故実の部分

は、室町中期以降に後補されたと考えられている（鈴木晋1998）。

⑧『武家調味故実』 天文４年（1535 年）に四條隆重が伝授したとされる室町時代の料理書である（続群書類従完成会 1933）。「しぎつぼの事」として「いしなべに酒を入て煎べし」、「雁のももきいりの事」として「皮いりするやうに石鍋にているべし」とある。

上記の３点の故実書から、石鍋は煮炊具として液体を加熱するために用いられたと考えられる。材質が石であることから、保温性に優れ弱火で加熱するのに適していたのであろう。

５．まとめ

前項までに茨木市域における滑石製品の様相を述べてきた。

生産地から運ばれる石鍋の大部分は淀川を遡って京都へ至ったと考えられる。茨木市は京都への途上に位置するが、出土した石鍋はいずれも外面に煤が付着しており、流通途上の新品ではなく、実際に使用されたものと判断される。

現時点での分布状況は、整理作業の進捗状況による影響も大きいが、いずれも「物資集散地・官人層の居住地・荘園中核集落・寺院関係など主要幹線沿いの遺跡」に該当すると判断される。

出土点数は、玉櫛遺跡が突出している。ただし、再加工中の破片が多数出土していることから、破損した石鍋に再加工を施す場であった可能性が考えられる（註 21）。豊中市庄本遺跡では、周辺の消費地から石鍋を回収して再加工を施していると考えられている（豊中市教育委員会 2004・橘田 2004）。玉櫛遺跡でも同様であったならば、周辺の遺跡から出土しないのは、玉櫛遺跡で回収して再加工を施していることによるのかもしれない。

時期別では、他地域と同様に 12 世紀後半から 14 世紀初頭にかけて多く出土している。

石鍋は 13 世紀に流通のピークを迎え、単なる「商品」ではなく、食器以上の価値が付加され、限られた階層の人々が入手し使用していたと考えられており、贈答品として分配された可能性も指摘されている。北部九州では一般的な煮炊具であったものが、関西以東では有力階層の人々が使用するものへ変化しており、この背景に調理方法の差以外に、遠隔地から運ばれた稀少性が影響していると考えられている（松尾 2017）。

石鍋が出土する遺跡では、各種の陶磁器などの広域流通品の出土も確認される。ただし、石鍋が回収され再加工を施される品物であるならば、単純に石鍋の有無のみでは、品物の流通や人々の移動の状況に直結することはできない。地域一帯をまとめて考えていく必要があるのだろう。今後とも、市内各遺跡の整理・報告書作成を継続して行くことによって考えていきたい。

註

１）滑石は蛇紋岩の周縁に生成される軟質の鉱物（硬度１）である。西彼杵半島では、「三郡変成帯」に属する長崎変成岩類の主な岩石である結晶片岩中に貫入した蛇紋岩の周縁部に生成され、鉱床が地表に露頭している（松尾 2017）。

２）九州では海浜部を中心としてほぼ全域で出土しており、特に生産地である西彼杵半島と博多周辺・有明海沿岸に高い密度で分布している。中国地方では瀬戸内海沿岸に出土が認められるが、日本海側では確認されていない。また四国でもほとんど出土していない。中部地方では数例が出土している程度で、出土遺跡も散在する。関東では鎌倉に多いがその他の拠点的な遺跡からも出土している。北陸地方では能登半島の両側のつけ根付近に集中して出土している。東北地方では出土遺跡は集中しないが、内陸部でも認められている。内陸部の遺跡は居館や城館遺跡とされるものが大半で、街道沿いに立地しているため、海路の他に陸路による流通が考えられている（松尾 2017）。

３）この他、和歌山県でも滑石を産出するが、製作地は確認されていない。ただし未製品が出土していることから、製作地が存在する可能性も指摘されている（河内 1991）。

４）後藤信義氏が 1991 年に大阪府下の集成を行った際には府下で 51 例確認されている（後藤 1991）。この時点では茨木市内の出土例は知られていなかった。この 30 年余りの発掘調査の進展の程が窺われる。

なお、粟生間谷遺跡における石鍋の出土地点は厳密にいえば箕面市域であるが、遺跡の包蔵地範囲が市域を跨いでいるため、本稿では遺跡数に含めている。

茨木市教育委員会が実施した調査の資料には、

近年の報告書作成作業で見出されたものがあり、今後も作業の進展によって遺跡数・点数とも増加すると思われる。

5）石鍋は素材となる滑石が柔らかく容易に加工できるため、破損後に再加工されて温石などの製品として使用されている（橘田 2004）。そのため、再加工品は石鍋とは別の流通経路を辿っている可能性がある。

6）『箕面市史』史料編一・二

7）『平安遺文』古文書編第二巻 302「法勝院領目録」

8）『朝野群載』第二十九巻上「中宮職請奏」

9）『小右記』寛仁２年（1018 年）５月 30 日・６月８日条

10）『山槐記』応保元年（1161 年）12 月 26・27 日条

11）『鎌倉遺文』古文書編第九巻 6315「大和奈良坂非人陳状案」、『八坂神社記録』応安４年９月 20 日条など

12）「総持寺領散在田畠目録写」南北朝・室町期 29（茨木市 2003）

13）史料上の溝杭荘には、院領（長講堂領）、興福寺・春日社領、大炊寮領、雅楽寮領、隼人司領、祈祷料所、大館氏知行分など多様な名称が認められる。

14）「興福寺維摩会不足米勘文案」（吉川 2004）、『雑事要録』（湯川 2005）

15）既刊報告書に掲載済みのものを集成しており、整理中の調査事例は図を掲載していない。なお、以下で記す図番号・遺物番号は各報告書掲載の番号である。

　玉櫛遺跡では、複数の調査で出土し、調査毎に報告書が刊行されているため、それぞれをⅠ・Ⅱ・Ⅲとし各報告書中での遺物番号を続けて表記している（例えば、Ⅰ－827 は『玉櫛遺跡』の遺物番号 827 である）。

16）以下では本稿で付した番号を記す。図中に報告書に記された出土地と遺物番号を記している。

17）木戸 1993 では、「ペン立てのような四角い台にふたつの穴の容器がのった製品が九州地方で認められる」とされている。また、「畿内周辺では土製で作られている」とある。甲斐 2001 で兵庫県たつの市宝林北遺跡の例が示される。

18）玉櫛遺跡（その１）の調査では、12 点掲載されているが、それ以上に図化できない破片も多数出土しているようである（大文セ 1998b　P. 146　14 行目）。また４次調査（大文セ 2003b）では 12 点出土し５点掲載されている。06-1 調査区（大文セ 2008）では４点が掲載されているが、その他の破片などの有無は記されていない。一方、市教委調査で概要を報告している 2009-1 調査では、石鍋は出土しているが現時点では未報告である（市教委 2012）。そのため、玉櫛遺跡の出土点数は更に多くなり、他遺跡との差がより大きくなる。

　なお、広島県福山市草戸千軒町遺跡では、13 世紀前半～ 14 世紀後半頃にかけて 2，171 点（広島県立歴史博物館 1998）、兵庫県尼崎市大物遺跡では、11 世紀～ 13 世紀後半にかけて 140 点の石鍋関連資料がそれぞれ出土している（尼崎市教育委員会 2005）。

19）「兵禅記」とあるが、記手が平信範であるので、『兵範記』と同じ史料か。ただし、『兵範記』の刊本には当該年の記述は収録されていない。

20）網野善彦氏は書き上げられた力王丸の家財を「都市的な家財」と評価している（網野 2007）。

21）茨木市内では温石とペン立て状石製品のみを確認しているが、広島県草戸千軒町遺跡では、温石の他、円板状、硯、漁網錘・棒状、スタンプ状のものなどがある（広島県立歴史博物館 1998）。大物遺跡では温石、硯、砥石、石匙、石錘、スタンプ状のものなどが出土している（尼崎市教育委員会 2005）。

参考文献

尼崎市教育委員会 2005『尼崎市埋蔵文化財調査年報平成７年度（６）』－大物遺跡第１次調査概報　その５－

網野善彦 2007「中世民衆生活の様相」『網野善彦著作集』第十三巻　岩波書店　pp. 377-410（初出：1985）

茨木市 2003『新修　茨木市史』第四巻　史料編　古代・中世

茨木市 2014「真龍寺古墳」『新修　茨木市史』第七巻　史料編　考古　pp. 380-384

茨木市教育委員会 1991「東奈良遺跡（90-1）HN　Ｇ－７－Ｃ・Ｇ・Ｋ地区」『茨木市埋蔵文化財発掘調査概要』平成２年度　pp. 27-48

茨木市教育委員会 2001「溝咋遺跡（その１）」『平成 12 年度発掘調査概報』 pp. 20-23

茨木市教育委員会 2012「玉櫛遺跡（ＴＫ 09-1）」『平成 21 年度発掘調査概報』 pp. 107-145

茨木市教育委員会 2020「太田遺跡 2019-3」『令和元年

度　茨木市埋蔵文化財発掘調査概報』 pp. 27-28
茨木市教育委員会 2022「01-1 調査」『宿久庄遺跡１』 pp. 43-56
茨木市教育委員会 2023 a「99-4 調査」・「11-1 調査」『宿久庄遺跡２』 pp. 28-57・63-86
茨木市教育委員会 2023 b「1980-2 調査」『中河原遺跡１』 pp. 22-26
今岡照喜・中村徹也・早坂康隆・鈴木康之 2005「滑石製石鍋の産地同定と流通」『中世瀬戸内の流通と交流』塙書房　pp. 223-248
大阪府教育委員会 1996『新庄遺跡』
甲斐昭光 2001「兵庫県出土の中世滑石製品」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　pp. 93-102
河内一浩 1991「和歌山県下における石鍋について」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会 pp. 181-196
橘田正徳 2004「庄本遺跡からみた神崎川下流域の流通」『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』日本中世土器研究会 pp. 225-248
木戸雅寿 1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会　pp. 127-145
木戸雅寿 1995「13. 石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　pp. 511-521
黒板勝美　編 1999『朝野群載』新訂増補国史大系　第二十九巻上　吉川弘文館　pp. 100-101
小泉和子 1998「調度について」『類聚雑要抄指図巻』中央公論美術出版　pp. 373-389
後藤信義 1991「大阪府下出土の石鍋」『大阪文化財研究』創刊号　財団法人　大阪文化財センター　pp. 45-48
財団法人　大阪府文化財調査研究センター 1998 a『総持寺遺跡』
財団法人　大阪府文化財調査研究センター 1998 b『玉櫛遺跡』
財団法人　大阪府文化財調査研究センター 2000『栗栖山南墳墓群』
財団法人　大阪府文化財センター 2003 a『粟生間谷遺跡　古代・中世編』
財団法人 大阪府文化財センター 2003 b『玉櫛遺跡Ⅱ』
財団法人 大阪府文化財センター 2008『玉櫛遺跡Ⅲ』
鋤柄俊夫 2010「東福寺と鎌倉」『日本中世都市遺跡の見方・歩き方ー「市」と「館」を手がかりにー』昭和堂　pp. 203-220
鈴木晋一 1998「『類聚雑要抄』の食物」『類聚雑要抄指図巻』中央公論美術出版　pp. 299-306
鈴木康之 2006「滑石製石鍋の流通と消費」『鎌倉時代の考古学』高志書院　pp. 173-188
続群書類従完成会 1929「類従雑要抄」『群書類従』第二十六輯　雑部
続群書類従完成会 1933「厨事類記」「武家調味故実」『群書類従』第十九輯　管弦・蹴鞠・鷹・遊戯・飲食部
続群書類従完成会 1970『教言卿記』第一
竹内理三　編 1963・1964『平安遺文』古文書編第２・５巻　東京堂
竹内理三　編 1975・1977『鎌倉遺文』古文書編第９・12 巻　東京堂出版
竹内理三 編 1978『八坂神社記録』一　臨川書店
東京大学史料編纂所 1969・1976『大日本古記録　小右記』５・８　岩波書店
豊中市教育委員会 2004「庄本遺跡第１次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成 15 年度（2003 年度）』 pp. 5-82
内外書籍 1935『山槐記』一
広島県立歴史博物館 1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』
松尾秀昭 2016「縦耳付石鍋の生産と流通ー東アジア世界の中の竹松遺跡ー」『９～ 11 世紀における大村湾海域の展開』長崎県考古学会　pp. 41-50
松尾秀昭 2017『石鍋が語る中世　ホゲット石鍋製作遺跡』 シリーズ「遺跡を学ぶ」122　新泉社
箕面市役所 1968・1972『箕面市史』史料編一・二
明治書院 1991「諸院宮御移徒部類記」『圖書寮叢刊仙洞御移徒部類記』下　pp. 405-416
吉川真司 2004「安祥寺以前ー山階寺に関する試論ー」『安祥寺の研究Ⅰ』京都大学大学院文学研究科 pp. 115-127
湯川敏治 2005「公家領荘園の運用機構ー近衛家領の荘官をめぐってー」『戦国期公家社会と荘園経済』続群書類従研究会　pp. 207-236（初出：1986 年）